

ひとのかたち カラフル人形をつくろう

2012年8月25日・26日 うらわ美術館ギャラリーD(視聴覚室)／浦和駅周辺



浦 和のまちを舞台に「地域と市民が主役のアートフェスティバル」として今年初めて開催された「アートフェスティバルうらわ2012」。人と人、人とまちのつながりを生み出し、賑わいのあるまち「浦和」の創出を目指すものです。今年のテーマは「ひとのかたち」、うらわ美術館のワークショップタイトルからつけられました。

カラフル人形は80cm×120cmの布からつくるので、てるてる坊主をアレンジした人形。てるてる坊主から手足や胴体をつかって綿を詰め、装飾をしていき、全長90cmほどの人形をつくります。個々の人形がつながるように、両手にはマジックテープをつけました。

人形の原形をつくる段階は意外と複雑で、子どもだけでは形づくりのがやや難解な部分もあり、同伴した保護者や講師、スタッフの補助で一生懸命に制作しました。最初はどんな形になるのかイメージできず、不安げなようでしたが、一度形ができてしまっただけで参加者全体の気持ちも一気に高まり、賑やかな雰囲気となりました。中でも子どもたちの集中力はすばらしく、お昼休憩の時間になっても夢中で自分たちの人形を飾りたてていました。

1時間の休憩時間の後、人形づくりの仕

上げをして館外へ。仲一商店街を通過して浦和駅東口市民広場までパレードをしました。途中、人形にさらなる飾りつけができるコーナー(髪ゴム、シール、ヘアピンなど)がアートフェスティバルの会場に設置されており、参加者は自分たちの人形をおしゃれに変身させました。埼玉大学の学生による似顔絵コーナーなどにも立ち寄り、学生たちとコミュニケーションを取りながら似顔絵を描いてもらっている参加者もいました。商店街を抜け、高架線下を通り抜ける際、そこでライブペインティングをしている人との挨拶としばしのおしゃべり。その後、浦和駅改札口前に展示されていた約900枚の「ひとのかたち」ぬり絵を鑑賞し、市民広場へ。自分の作品である人形をかかえてのパレードは参加者のどれも恥ずかしがることなく、むしろ誇らしげなようでした。

市民広場に到着すると、メインステージ上に用意してあった展示スペースに人形の手と手をつないで展示。アートフェスティバルに来ていた市民に紹介するとともに、一人ずつ感想を話してもらいました。「カラフル人形は自分の分身」「人形が繋がったように、参加者同士もつながることができて良かった」「今日つくった人形は、家でもかわいがりま



す」など、どの参加者も満足した表情でした。(参加者:25日16名/26日11名)

田島均(SMF運営委員)

今回のワークショップの参加者の大半を占めた未就学児から小学校低学年の子どもたちは、人の形をつくるのがたいへんだったと思います。皆さん、親御さんに手伝ってもらいながらも、よくがんばってつくってくれました。子供だけでなく大人も楽しんでじょうずにつくっていただきました。

できあがった人形は自分にとって、お友だちみたいな存在?それとも理想の人?

人は人の形をつくる時、いろんな人のことを考えながら細かい形を決めていきます。友だち、家族、同じクラスの人、あこがれの有名人、好きな人、はたまた好きな人が好きそうな人のこと……。たとえば、人形にかわいい服を着せることも、結局はだれかのことを思い浮かべながら「かわいい」を決めているのだと思うのです。

このワークショップの目的は、いろんなことを考えながら、ひとつの形につくりあげることです。それは、普段の生活の中で自分自身が作りあげられることをなぞらえています。

秋元珠江(造形作家)

多世代交流ワークショップ におい色 パズル

2012年9月9日 うらわ美術館ギャラリーD(視聴覚室)

う らわ美術館の秋のワークショップとして定着しつつある「多世代交流ワークショップ」。今年「におい」を視覚化しました。「におい」からのイメージを色と線、形で表現してみようというのが今回の活動でした。

使用した紙材は、両面色違いの片面ダンボール。「におい」ごとに紙を変え、オイルパステルを使ってペアで一つの紙にイメージを色と線で表現しました。同じ「におい」でも参加者によってさまざまな表現の違いが見られ、お互いの感じ方の違いを興味深くおしゃべりしているペアもありました。また、波状の紙面を押しつぶして表情を出すなどの工夫も見られました。次に、色と線で表現した5枚の紙をよくシャッフルし、どれがどの「におい」なのかかわからないように裏返しておき、講師が指定した「におい」のイメージでランダムに選んだ紙を切り取りました。曲線で切り取ったり直線的に切り取ったりする人、ジグザグに切り取ったりする人と千差万別の表現でした。切り取った紙片を裏返して、「あ、これはあのにおいの(表現)だ!」と確認しているペアの姿もありました。

活動も最終段階に入り、ペアでつくった紙片を立体に組んでいきました。あらかじめ準備しておいた切れ込みが入った土台に、ハサミで切れ込みを入れた紙片を組み合わせていきました。組んでいくうちに横に広がっていくペア、高く組んでいくことに一生

懸命のペア、自分の領域を決めてそれぞれ組んでいくペアなどが見られましたが、なぜか統一された雰囲気の立体になっていくのは興味深いものでした。

できあがったペアの共同作品は一つのテーブルに集めて展示。その後、しばしの撮影会となりました。「未来都市みたい」「作品の中に入ってみたい」「このカーブがおもしろい」など、思い思いのおしゃべりも弾み、ペア以外との交流も生まれました。

その後は、講師の小池ちかこさんを中心にした鑑賞会。目に見えないものを色と線、形で表現しようとするの難しさや楽しさ、普段いっしょに活動することのない人や親子とともに一つの作品をつくる時間の大切さなどが話題の中心となりました。

鑑賞会を終えて、それぞれの共同作品は解体され、半分ずつ参加者の持ち帰りとなりました。ペアで相談しながら紙片を分けて袋に入れながら、「家でまた組み立ててみる」といった声や「紙片を貼って飾っておく」「家でも別のにおいでやってみよう」など、今回のワークショップへの好意的な意見が多く聞かれました。(参加者:午前の部23名/午後の部20名)

田島均(SMF運営委員)



多世代交流ワークショップも4回目となり、今年は嗅覚に焦点を当て、目には見えない「におい」を視覚化しました。臨床美術の手法なども用いて抽象表現にすることで、十分に主観を表現できるよう、またコミュニケーションを内包するワークショップとなるよう、美術館のワークショップ担当者や入念な打ち合わせをして、画材やアプローチを工夫し、試作を重ねて臨みました。その試作過程では、能動的な表現を促すために創作過程において何を感じ、何にこだわる、どんなことに感覚が広がっていくのか、またその作業の快・不快などを自分の中でできる限り確認をしています。そうした感覚を得ることで参加者と共鳴し合い、表現を引き出せたらと思っています。

ワークショップでは多くの言葉がけもすし、作品の鑑賞会では互いの感想を言葉にしあうことで個性を認め合い、自分の未知の側面を発見したりもしますが、一方言葉によらないものが心に宿る感覚も、このワークショップでは大切なものです。

小池ちかこ(臨床美術士)

